

主題「子どもが主体的に楽しめる活動と工夫」

副主題：日常と行事の循環に着目した保育実践

認定こども園みさとさくらの森 藤井美智子

1. 背景・課題 対象学年は乳幼児期の多くをコロナ禍で過ごし、他者との関わりや身体を使った遊びの経験に偏りが見られた。 入園当初から、友だちとの関わり方、身体表現、集団生活への集中に課題があった。一方で年中時から年長児のダンスや行事を見てきたため、行事への期待は高かった。 2. 園の特徴 埼玉県三郷市北部に位置する幼保連携型認定こども園 海外にルーツをもつ子どもが約 5 人に 1 人、療育施設併用児も在籍 キリスト教保育を基盤に、インクルーシブな関係づくりを重視	3. 研究目的・方法 この実践では主体性を「保育者が環境を整えたいうえで、子ども自身が活動の意味を見出し、自分なりの関わり方を主体的に選択する姿」として捉え、この視点に基づき、三つの活動で積み重ねられた経験が日常から園行事へ、さらに行事後の日常へとどのように循環し、子どもの主体的な学びを支えているのか、その過程を明らかにすることを目的としています。 子どもの姿をもとに計画を立て、身体活動・制作活動・話し合い活動の 3 つに重点を置いて計画→実践→評価→改善を繰り返し行い、保育を構成しました。
--	--

対象	期間	記録資料
年長児 23 名	令和 7 年 4 月～令和 8 年 3 月	保育記録・指導案・写真/動画 ・保護者アンケート

4. 三本柱を軸とした年間実践の構造

柱	1 学期	2 学期	3 学期
身体活動	基本動作の安定 リズム・模倣の定着	他者との動きの調整 協働を含む遊び	立ち位置・間の意識 連携と挑戦の継続
制作活動	素材体験と自由表現	共通テーマの制作 役割をもつ活動	大道具・小道具の協働制作 表現との統合
話し合い活動	思いを言葉にする 安心して話す	意見の共有とすり合わせ	合意形成と役割分担 自分たちで構成

年間を通して、基礎作りから協同的な活動へとつなげていった。

5. 日常の取り組み

○**身体活動**…リズム遊び・リトミック・体操・ダンス・コーディネーショントレーニング

- ・特定の技能の習得を目的とするのではなく、「**友だちと気持ちを合わせる楽しさ**」や「**体を動かすことの心地よさ**」を感じながら、**心身を整える時間**として位置づけてきた。
- ・朝のルーティーンとして日常的に取り入れ、子どもの姿に応じて時間や内容を調整しながら継続したことで、活動そのものを楽しみながら自然と体を動かす姿が定着していった。

☆コーディネーショントレーニング（身体あそび） 柔道整復師の講師による専門的指導

目的はとてもシンプルで、**思った通りに体を動かす力を育てること**。特別な技術を身につけたり、筋力を高めたりすることを目的とするのではなく、脳と体を連動させながら、さまざまな動きを経験することで運動神経の発達を促していく。**基本はあくまでも「遊び」であり、子どもが楽しみながら、自分で考え、動き、仲間と関わる力を自然に身につけていく。**

○制作活動

- ・自然素材・廃材・基本素材を日常的に選べる環境を構成
- ・『ざいりょうやさん』や可動式ワゴンにより、材料を自分で選び、試行錯誤する過程を大切にした。
- ・**行事制作も日常の延長として協働制作へ発展**

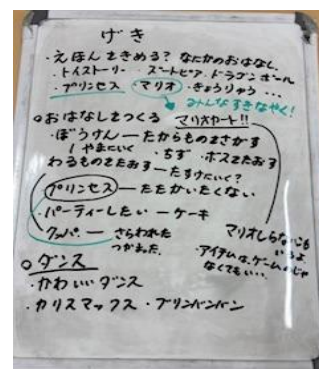
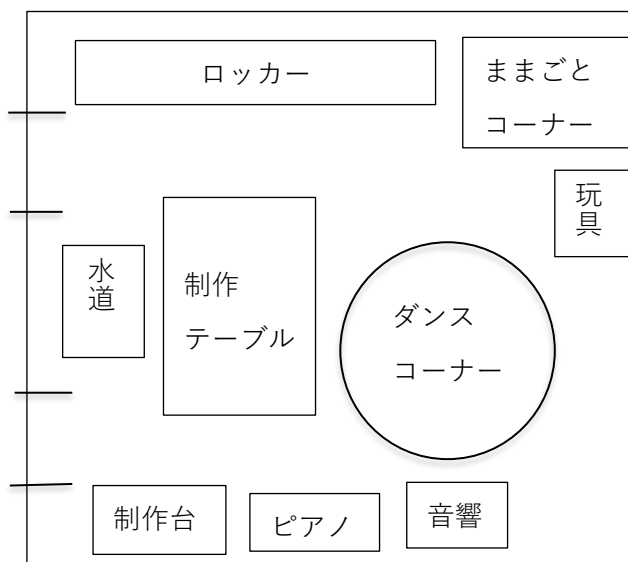


○話し合い活動

- ・大きな行事だけでなく、日常のその日の遊びだったり、当番の仕事を決めたりと、どんな小さなことでも、子どもたちと相談して進めてきた。
- ・プロジェクターの活用（前年度の様子をプロジェクターでクラスの壁に投影し、様子を思い出したり、前の年長さんの動きを確認した）
- ・ホワイトボードで意見を可視化し、付箋で蓄積（付箋を使用して出た意見を壁に貼ることで、いつでも見返せるようにし、話し合いを一度で終わらせるのではなく、日をまたいで考えを深めたり、友だちの意見をもとに新たな発想を広げたりできるようにした。）
- ・**発言しにくい子も参加しやすい環境を整え、後の劇づくりの土台となった**

日常の実践	育まれた力	劇での具体的な姿	行事後の日常への還元
・身体活動・制作活動 ・話し合い活動の反復	・調整力・表現力 ・見通し・協同性	・立ち位置・動線 ・役の理解 ・台詞や動きの再構成	・本番後も踊る ・劇ごっこで再構成する ・年下児へ遊びが広がる

保育室の環境構成



話し合いの可視化
ホワイトボード
・付箋の活用



音楽系の用具を
まとめている棚



6. 日常の延長としての劇実践（12月～3月）

4月から親しんできたダンス活動を基盤に、「クッパにさらわれたプリンセスを、マリオカートに乗った仲間たちが助けに行き、最後はパーティーで踊る」という構成へ展開した。流行曲や日常的に踊ってきた曲を取り込み、ダンス中心の劇として子どもたちが再構成していった。

時期	活動	子どもの姿	保育者の援助・環境構成
12月 1週目	遊びの中の表現	ダンスの自由な振り付けやごっこ遊びが広がる。 一方で役割固定により入りにくい子もいた。	音源・再生機器・制作素材を常時使えるようにし、役交代や新しい設定を促す問いかけを行った。
12月 2-3週目	ストーリー ・構成づくり	「劇は何を踊る？」から話し合いが始まり、思いついた案を次々に発言。マリオの世界観へ収束していった。	意見をホワイトボードに可視化し、付箋で蓄積。話題が広がりすぎた時は場面・登場人物・動きへ具体化して整理した。
1月 2-3週目	役割決定	「戦うプリンセスもあり」「複数の役を組み合わせたい」など柔軟な発想が見られた。役のイメージを持ちにくい子もいた。	希望を丁寧に聞き取り、固定的な性別役割観を広げる言葉をかけつつ、最終選択は本人に委ねた。制作と結び付けて役を具体化した。
1月 2-4週目	動き・台詞 ・大道具づくり	立ち位置・動線・台詞を試しながら修正。日常で踊ってきた曲を場面に結び付けた。制作を通して消極的だった子の参加意欲も高まった。	実際の舞台で試す時間を確保し、「どうしたら見やすい？」と問い返ししながら試行錯誤を支えた。大道具・小道具の素材選択も保障した。
2月 1週目	予行後の再構成 ～本番	時間が余ったため再構成。「今から長い台詞は難しい」など現実的判断が生まれ、手紙形式の場面を追加。本番ではグループで声をかけ合って動いた。	初期の記録を振り返り、短時間で成立する構成を共に検討。直前確認は簡潔にし、仲間同士で支え合える構造を整えた。
2月後半 -3月	日常への循環	本番後も「曲かけて」と踊り、劇ごっこでは役を再選択。お別れ会では年下児へのプレゼントとしてマリオカートを補修し、遊びが園全体へ広がった。	行事を一度きりで終えず、再構成の場と異年齢交流を設定。制作物の扱いも子どもに委ね、相手を意識した手直しを支えた。

劇実践で見られた主体性	本実践が示したこと
・自分のやりたい役を言葉にする ・必要に応じて役を組み合わせる ・見え方や動線を考えて修正する ・本番後も自分たちで再構成して遊ぶ	・日常の活動が積み重なることで、行事は『やらされる課題』ではなく『自分たちの活動』になる ・保育者の役割は、答えを与えることよりも、見通し、可視化、再構成の機会を支えることにあ

7. 保護者アンケート・考察・まとめ

実施時期	対象／回収	Q1 家庭で園の活動を話す	Q2 家庭で歌・踊りの再現
令和8年2月	年長組保護者 23名 回収率 100%	よく話していた 64.7% 時々話していた 35.3% あまり話さなかった 0%	よく見られた 70.6% 時々見られた 29.4% あまり見られなかった 0%

Q3 身体を使った活動への様子	自由記述の主な内容
・とても楽しんで取り組んでいた 70.6% ・少し緊張しながらも取り組んでいた 29.4% ・消極的／変化なし 0%	・家でも台詞やダンスを練習していた ・自分の役だけでなく友だちの台詞や動きも覚えていた ・苦手なことにも挑戦する姿が増えた ・友だちとの関わりや園生活への前向きさが広がった

考察

今回の取り組みを通して、劇の活動では、身体活動・制作活動・話し合い活動という三つの活動が、互いに補い合いながら子どもの主体性を支えていることが見えてきた。

まず、身体活動を日常化したことで、心身の安定や集団で動きを共有する基盤が整いその積み重ねが劇での動線理解や動きの調整、場面転換の判断につながった。

制作活動では、素材選びや試行錯誤を通して役や場面の理解が深まり、言葉や身体表現が得意でない子も参加しやすくなった。制作物の扱いを子ども同士で相談する姿も見られ、活動を自分たちで再構成する力が育っていた。

話し合い活動では、意見を可視化して蓄積できる環境が、構成の具体化や条件変更への再調整を支えた。日常的な対話の積み重ねがあったからこそ、予行後の再構成が可能になっていた。

この三つの活動は、**制作 → 身体表現 → 話し合い → 再制作**と連鎖しながら深まり、**子どもが活動の意味を見出し、主体的に選択する姿を支えていた。**

保護者アンケートでも、家庭で活動を話す子が多く、歌や踊りを再現する姿も見られ、園での経験が家庭へ広がっていることが確認できた。

以上より、日常で育まれた経験が行事で統合され、達成感や自信となって再び日常へ還元される循環の中で、主体性が形成されていたといえる。行事は日常の延長であり、同時に主体性を促す実践として位置づけられると考える。

まとめ

この実践を通して、**日常の中で積み重ねられた経験が行事の中で統合され、再び日常へと還元されていくという循環**の重要性が確認できた。一方で、この循環をより意図的に捉え、保育実践として位置づけていくことが、今後の課題である。

本実践で位置づけた身体活動は、特定の運動技術の向上を目的としたものではなく、動くことの心地よさや、やってみようとする意欲、自分の身体の使い方を感じ取る力など、身体を通して環境に関わる総合的な力を育むものとして機能していた。近年、こうした力は「フィジカルリテラシー」として国際的にも注目されている。今後は、この視点から身体活動の意味を再整理し、日常の保育により意図的に取り入れていきたい。

また、三本柱の相互作用に着目したものの、それぞれの活動がどのようなプロセスで結びつき、子どもの変容に影響しているのかについては、さらに検討の余地がある。特に、個々の子どもの違いや背景に応じた関わり方については、今後も継続して探っていく必要があると感じている。

今後は、子どもの姿を起点としながら、日常と行事の循環をより明確に位置づけること、そしてフィジカルリテラシーの視点を取り入れた実践を積み重ねることで、主体的な育ちを支える保育の在り方をさらに探求していきたい。

☆フィジカルリテラシーとは、子どもが体を動かすことを楽しみながら、意欲・自信・体の使い方・仲間との関わりを育てていく総合的な力のこと。運動の得意・不得意にかかわらず、生涯の健康につながる基盤として重視されている。